
泣かない空

田中サイダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣かない空

【Nコード】

N6121A

【作者名】

田中サイダー

【あらすじ】

特にやりたい事もなく、日々を過ごす『私』。人と馴れ合う事を嫌い、そのくせ誰とでも簡単に寝てしまう。『私』は何をしているのだろう。何をしたいのだろう。問い掛ける相手も居ない。静かで孤独な話。

第一話 煙草と男

「いる？」

男は煙草を私に向けて言った。私は軽く首を振ると、男はそつ、
と言いつつそれを一本くわえると、特に美味しそうでも不味そうでもな
い様子で紫煙をくゆらした。私は緩慢に起き上がる。

その動きに合わせてベットのスプリングが軋んだ。

「何、もう帰んの？」

煙草をくわえたまま男は聞いてくる。事が終わった後は大抵、泊ま
つていく私だからそう聞いてきたのだろう。

「課題、まだやってないの」

私は、脱ぎ散らかした服を拾い集めながら着替える。

「何、課題って」

「調べもの」

ふうーんと興味無さ気に男は呟く。

シャワーを浴

びたかったが、ぐずぐずしていたら終電を逃してしまふ。

「送ってごうか？」

「頭打った？」

ハツと鼻で一笑すると男はムツとした顔で言う。

「変態に犯さ

れちまえ」

「ああ、あんたみたいなの？」

「うわ…可愛くねえ」

「ありがとう」

澄ました顔で言うてる。そうすると寝てないしとぼそりと言わ
れた。

こいつとも、そろそろ終

わりかな、なんて思いながら、私は男の部屋から出た。

第二話 夜空と私

『私』の家は、普通だ。父はサラリーマン。母は専業主婦。下に3歳、歳の離れた弟がいて、家は庭つき一戸建。

庭といっても猫の額ほどだが、シロと名付けられた雑種の犬の小屋が隅っこに置かれている。

父も、母も常識ある人たちで、過不足なく、適度に愛してくれている。弟も反抗期もなく、親の期待に応えている。

不満はない。不満などない。『私』が将来を決めかねて、大学を希望しても特に何も言わず、大学へ入れてくれた。不満などあるはずがない。家族全員が、優しい。誰から見ても幸せな家庭だ。本当に『絵に描いたような…』家庭で育った。

なのにどうして、私はこんなものになっってしまったのだろうか
ガタンツゴトンツ、ガタ

リズムを刻むように、走る電車。窓の外は濃い闇が広がり、時折ビーズのような光が一つ二つと、見えるばかりだった。

なんとか終電に間に合い、私は電車に揺られている。

無意識に息を吐きながら、窓のサッシにぺたりと腕を置く。しかしそのひやりとした感触に一瞬、腕を浮かしてしまふ。なので今度はサッシに肘を突き、頭を支えながら窓の外へ顔を向けることにした。

夜に見る電車からの景色は好きだ。景色といってもほとんど黒で塗り潰されてはいるが、そのなかにポツンと佇む外灯や、位置が変わらない星や月を眺めるのが昔から、好きだった。

今日は生憎、月は出ていない。私は、降りる駅に着くまでずっと夜空を眺めていた。

第三話 携帯と本

私の身体は間違いないと汚れていると思う。赤くなるまで肌を擦っても、まだあのニオイがとれない気がする。あの行為で満たされるのは、一瞬だけだ。 「男」

、が私の中に埋め込まれる時だけ。キスも、愛撫も好きではない。むしろ不愉快だ。

吟味して選んだ数冊の本を手に席に座ると、丁度携帯が震えた。

いくらマナーモードにしているとはいえ、本をめくる音しかしない図書館ではそれは十分、騒音になりうる。現に私からして、右斜めの窓際に座っている女性は、眉をひそめている。居心地が悪いが、携帯を開き確認する。

メールが1件と、着信が3件。全て同じ人物。

あの男だ。あいつとした後は必ず、衣服に煙草の臭いが染み付いて母に言い訳するのに困った。 いつまでもメールと着信のマ

ークが待ち受けにあるのが嫌なので、中身を見る。『なんで無視すんの？』なんで無視すんの？か、理由はない。明確な理由はないが、ただ終わりにしたいだけだ。私は携帯の電源を切ると、本を開き読み始める。

煙草の男とは、奴の自宅ですべて以来会ってもいないし、電話もメールもしていない。まだ、長くもった方だと思う。（あくまでセフレとしてだけだ）

煙草の臭いには閉口したが、奴は今までで一番、ましな性癖の持ち主だった。ただのセックスをするだけで、特に干渉してこなかった。

あの日までは。

あいつにそんなつもりは無かったにせよ、

一度そう感じるともう無理だ。

それから私は、あいつから

の連絡を無視し続けた。

第三話 携帯と本（後書き）

やっと更新してこた。 精進します。

第四話 赤と黒（前書き）

駄文です…。こんなのでよければ読んでやってください。

第四話 赤と黒

一週間、電話もメールも無視し続けると、もうあいつからは何もこなくなつた。これが私の、縁の切り方だ。昔から、喧嘩ごとや修羅場は嫌いだった。

少しでもそんな空気を感じると、全て投げ出したくなる。

これでいいや。

面倒臭い。そうやって、遠ざけておけば相手は呆れるかして関わつて来なくなる。

誰も来ないで。

入ってこないで。

干渉されるのは嫌いなのに、淋しくなると私はまた、満たしてくれる男を探す。

それは決して、彼氏とかいう類では無く、身体で補おう。

干渉されずに、満たされたい。

面倒臭いこと

は、嫌い。そんな人間に友人なんかできるはずも無く、いまや私に声を掛けようとする人も皆無だ。

騒がしい学食

内で一人ポツンと、昼食を食べていると、ふと思いつ出した。昔の私だったならそれに堪えられず、友人作りに励んだだろう。

今は、群れる人達の気が知れない。

楽しそうな彼ら達を見ると、思い出してしまふ。

最悪だった高

校時代を。

思い出すと、胸がムツとし、

昼食のきつねうどんを嚼ると少しむせた。涙目になりながら、息を整えた。自分が、正しいと信じて疑わ

なかつた。甚だしい程の自信を持っていた。己の無知も何もかも無視したそれは高校で、ねじ伏せられた。嘲笑や蔑みの中で…。

第四話 赤と黒（後書き）

一応タイトル説明。 赤 高校時代の私 黒 今現在の私
という意味（？）です。 蛇足ですね。すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6121a/>

泣かない空

2010年12月8日02時25分発行